生徒相互の関わり合いを求めた国語科授業の実践

鈴木邦浩

一　はじめに

○静岡県立金谷高等学校は大井川の流れを東に、茶所「牧ノ原台地」の麓、金谷町にある全日制普通科の高校である。全校生徒数は約六〇〇名（一学年五クラス約二〇〇名、男子八〇、女子一二〇名）であり、中規模校という特性もあり、教員と生徒の距離が比較的近い学校という評価を得ている。生徒の気質は非常に素直で、温和な者が多い。その一方で学習面、運動面ともに、率先して取り組もうとする積極性には乏しく他者追随型の生徒が多い。教員側には、より高い目標を掲げその達成目指して積極的に挑戦する、そうした「たくましさ」を培ってほしいという願いがある。校訓である「たくましく心ゆたかに前進しよう。」その「たくましさ」を学校生活全般を通じて養いたい。卒業後の進路先は四年制大学、短期大学、専門学校、就職それぞれ約四割、三割、二割、一割となっている。

○赴任以来七年目を迎えた。七年前、ある日のこと、授業前の休み時間、教科当番に依頼をした。「ノートを配っておいてくれ。」始業のチャイムが鳴り、教室に入ってみると座席表を見ながらノートを配る当番の姿。座席表での確認を何度も繰り返す当番。「その名前が誰なのか、わからないのか？」

私の問いかけに対して返された「はい。」という力のない答え。私にとっては大きな衝撃だった。『クラスの仲間の名前がわからない。』この問題が当番一人の問題ではないとわかった時、生徒相互の関わり合いの必要性を私は痛感した。

二　生徒の実態

○無駄話なく席に座り、一時間の授業が淡々と終わる。一見何の問題もない授業態度のように思われる。しかし、生徒個々の興味、関心が「授業」に向けられていなければ「問題なし」とは言えない。

○生徒個々の学力差、関心の差は年々大きくなってきており、板書された問いに対して答えを考えたり、作業プリント等において考えさせる問いに取り組ませる際、自分なりの解答をまとめられない（書き表せない）者も見られる。

○説明中心、講義式の授業に対しては、集中力の持続が難しく、

無駄話、居眠りに走る生徒が見られる。授業の停滞を招いてしまう。

内容にもよるが、集中力を持続できるのは十五分から二十分程度ではないかと思われる者が多い。

三　授業の停滞を打破するために

A、授業、教材に対する興味・関心を持たせる第一歩として『読み』の充実を図る。

B、「教師対生徒」の関わりに終始するのではなく、『生徒対生徒』の関わりを積極的に取り入れた授業を展開する。

四　具体的な手立てとして

a、「読み」を充実させるために、『ブツ切りの読み』を導入する。（古文）

b、教室内に『二人組』を作り、読む場面、考える（考え深める）場面などで、効果的に使う。

生徒相互が関わり合う場面を積極的に設定する。

五　実践例

（『伊勢物語』芥川より）

（一）『ブツ切り』の実際

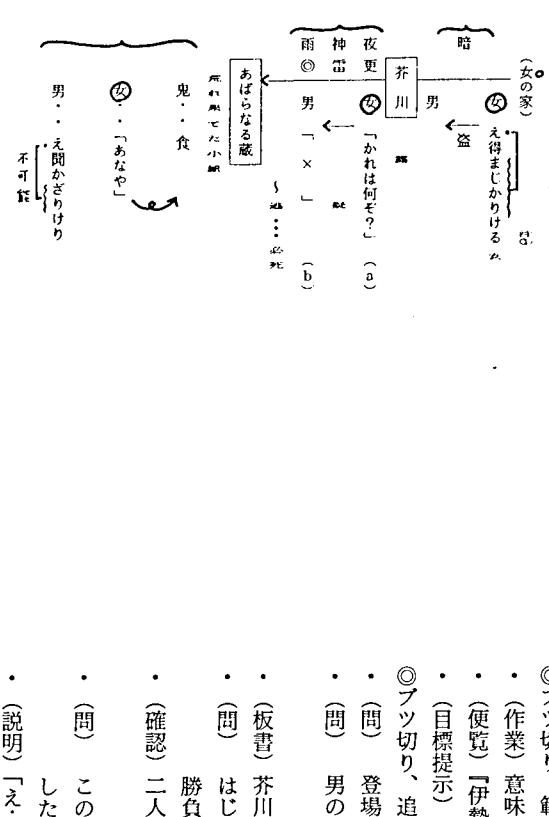
①　昔、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに来けり。芥川といふ川を率て行きければ、草の上に置きたりける露を、「かれは何ぞ。」となむ、男に問ひける。行く先多く、夜も更けにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいとみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵に、女をば奥に押し入れて、男、弓・胡籙を負ひて戸口にをり、「はや夜も明けなむ。」と思ひつつゐたりけるに、鬼、はや一口に食ひてけり。「あなや。」と言ひけれど、神鳴る騒ぎに、え聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば、率て来し女もなし。足ずりをして泣けども、かひなし。

A　白玉か何ぞと人の問ひし時　露と答へて消えなましものを

(二) 板書計画

六、略奪愛？

①



(三) 学習指導過程

【第一時】

・(板書) 副題、場面番号①

◎ブツ切り、範読（教科書に「ブツ」をいれながら）

・(作業) 意味調べ

・(便覧) 『伊勢物語』

・(目標提示) 今日は登場人物の押さえと動きを読み取りたい。

◎ブツ切り、追読（登場人物は誰か。

・(問) 登場人物は誰か。 —男、女、鬼

・(問) 男の居場所、最後にいるところはどこか。 —戸口、あばらなる蔵

・(板書) 芥川、女の家

・(問) はじめの居場所、なぜ「女の家」だとわかるか。実力勝負。

・(確認) 二人組で確認。代表指名。 —盗み出でて、とあるから。

・(問) この女、どんな女だと言っているか。手掛かりを指摘したい。 —え得まじかりける女

・(説明) 「え…打消」で「不可能」を表す。

(問) 「結婚できそうになかった女」とはどんな女を意味するか。二人組で相談。代表指名。 —人妻、身分が高い女

・(説明) ここでは「身分の高い女」を指す。

(板書) 女……高貴

◎ブツ切り、交替読みⅠ（特に芥川の場面の、男と女に注目して）

・（問）　誰が誰にどんなセリフを伝えているか。
二人組で確認。交替読み、後で読んだ人、先に読んだ相棒さんに伝えなさい。
代表指名。　　－女が男に「かれは何ぞ。」

・（説明）「ぞ」はここでは「疑問」だから「あれはなあに？」の意。

（問）　女は何を指して「あれ」と言っているのか。－露
こんなところからも、「女＝高貴」が分かる。

・（問）　一方の男に注目。なぜ「露だよ」と答えてあげないのか。実力勝負。

（確認）二人組で確認。今度は交替読みで先に読んだ人が相棒さんに答えなさい。
代表指名。　　－逃げるのに必死だから。

◎ブツ切り、交替読みⅡ（今日の内容を振り返りながら）

【第二時】

・（前時復習）ノート注目。前の時間は登場人物の押さえと男の居場所の変化に注目した。

（指示）内容を思い出しながら二人組で読み通そう。

◎ブツ切り、交替読みⅢ

・（目標提示）今日はこの場面の状況をしっかり読み取りたい。
読みについても仕上げよう。

・（前時復習）「あばらなる蔵」は「荒れ果てた小屋」という意味だった。

（問）　なぜ、そんな小屋の中へ逃げ込まなければならなかったのか。
代表指名。　　－雷、大雨

◎黙　読（「あばらなる蔵」以降をじっくりと）

・（問）　「荒れ果てた小屋の中で」何が起こったか、まとめなさい。まずは実力勝負。

・（指示）「運命のジャンケン」
負け組が勝ち組に「荒れ果てた小屋の中で」何が起こったか、伝えなさい。
代表指名。　　－女が鬼に食べられた。
女の悲鳴、男には聞こえなかった。
雷で聞こえなかった。

・（説明）ここにも「え…打消」がある。「不可能」の意、「聞くことができなかった」という意味。

・（説明）歌Aについて。
板書（a）、（b）、，（b）の指摘。「まし」＝反実仮想。

◎音読テスト
先程の勝ち組が、まず「読み手」、負け組が「審査員」。
「読み手」が間違えたら「やりなおし」と言いなさい。
勝ち組が合格したら、今度は負け組が「読み手」です。

・（作業）自己流解釈作り

（確認）鈴木流解釈紹介

・（補足）副題について　～女の気持ちは実はどうだったのか。
強引に連れ出されたのだろうか。

「盗み出でて」とはあるが、「芥川」あたりのやりとりからどうだろうか。「むりやり連れ出された」とは言えないようだ。だからノートに「?」が付いている。

(補) 授業実践の中で

①「読み」のバリエーションは、主に、

a、範読　b、追読　c、黙読

d、二人組の読み

②『二人組の読み』の実際

現代文、漢文……句点までの交替読み。

古文……『ブツ切り』に従っての交替読み。

ex、視点を与えての交替読み　(「登場人物は誰か、探しながら」)

内容確認のための交替読み(「ここまでの内容を確認しながら」)

③『二人組での取り組み』その他。

前段階……実力勝負(ある問いに対して自分の考えをまとめる場面。)

『二人組確認』　(互いの指摘、意見についての相違を論じ合う。同意・納得できる内容については、自分のノートへ補足、訂正。)

『運命のジャンケン』(二人組を勝ち組、負け組に分け、挙手をさせる。そのうえで発問、指示)

ex、「まず、勝ち組が負け組に答えを伝えてみよう。困っていれば負け組が助けよう。」

六　生徒の声
～『ブツ切り』『二人組』に対して

○『ブツ切り』の交替読みに対して

・一つ一つが短くなるから覚えやすくて良い。
・文章を暗記できるようになってすごくいい。
・交替読みは読みを覚えていい。
・文節がわかりやすい。
・一人で読むとつい、しっかり最後まで読まないことがあるのでいいと思う。
・分からない読み方を友達に聞ける。古文は「。」が少ないから、読みにくいけど、ブツ切りにするとリズムにのって読める。
・気軽に読める。
・すごくいい。一人で読むより二人で読む方がわかる。ブツ切りによって短くなって切る所もわかっていい。
・やっぱり声に出して読まないと忘れてしまうから自信がもてる気がする。
・一人で読むよりちゃんと読むからよいと思う。
・良い。一人で読むより二人の方が大きな声で読めるから。
・必要だと思う。おぼえやすい。何回も読めるから。
・一人で読むのに比べどういうふうに読むかっていうのが気軽に隣の人に聞けてとってもNICE。一人で読むより楽しく

てＮＩＣＥ。
・毎日楽しく読めていいと思います。
・部分として読むので読み易くて二人でいるので間違いもわかりやすいから。
・一人で読んだりするより二人で交替して読んだ方が楽しいしおもしろい。
・読んでいるうちに頭の中に記憶されて暗記しちゃう。理解しながら読める。二人だから余裕を持って読みができる。
・ブツ切りだとリズムにのれる。おぼえやすい。
・読みは苦手だけどブツ切りで隣の友達と読むなら長く読まないからたすかってます。
・読みが苦手だけどまちがえていたときに注意できる（指摘し合える）からいい。
・なんとなくリズムがつかみやすくていいと思っている。
・読みはあまり得意じゃないけど、ブツ切りみたいに少しずつなら自信を持って読むことができる。
・ブツ切りで読みを練習すると、覚えやすいしわすれにくい。
・読むのはあたりまえだから（良いも悪いも）べつにない。
・いいと思う。（『ブツ切り』なしだと）どこで文をきってよめばいいかわからなくなるから。
・ダメ。一人の方が集中できる。

○『二人組』での相談に対して
・相談することにより自分の意見に自信が付く。
・他の人の考えを聞くことができ、勉強になる。
・自分で最初に考えて後から確かめ合うのはいい。
・いろんな人の違う意見が聞ける。
・自分でやってわからなかったことを二人組で話し合う事でわかることがあるのでいいと思う。
・お互いの考えが分かる。
自分の考えと照らし合わせることができる。
・答えに自信がない時にやると落ち着く。
・不安なことを相談して、不安が消えてちょっとこころづよくなれるからいい。
・一人で考えるより他の人の意見を聞けた方がいいと思う。
・一人じゃわかんないことも二人で考えるとわかることもある。
・二人組もいいけど、まわりで相談してもいいと思う。
・必要。これからもつづけたい。自分の意見をまとめやすいから。
・二人で相談することによって、お互いの意見が交換できＮＩＣＥ。
・仲が深まってＯＫって感じです。
・自分と他人の考え方の違いがわかって良い。
・わからないことを一人で考えるより二人で考えた方がよっぽどいいと思います。
・一人だと（間違ってるかもしれなくて）不安になる。でも確かめ合えるから（答えが）あってたりすると自信が付く。わからん所は相談し合えるからいい。
・二人組の中で意見や考えを交換できていい。

・周りの友達と相談したらいいと思います。
・相手の考えたことがわかり、（自分の答えにも）自信が付く。
・細かいところも考えられる。だけど、もう少し時間がほしい時もある。
・相談の前にノートに書いているんだけど、私は書くのが早くないので、相談の時間が少ししかない。
・あんまり意味がないような気がする。
・別に二人組じゃなくても周りの人で言えばいい。
・男女の組み合わせだと話しづらい時もある。
・良。隣と同じだと安心できるから。

七　おわりに

○「授業に対する興味、関心をいかに抱かせるか」教材そのものに対する期待感、授業そのものに対する期待感、そのきっかけは何でもいいと思う。小さなきっかけ作りの一例としてこの報告をまとめさせていただいた。

○「この一時間でここまでできた、これがわかった」、そうした一つ一つの積み重ねが達成感、成就感に結び付く。授業者は授業者としての目標達成に尽力するのに併せて、生徒個々に対して達成感、成就感をどれだけ持たせられたか、日々の実践の中で一時間毎に確かに評価されている。

○『二人組』の導入。「話をやめなさい」ではなく「話（はな）しなさい。話をしなさい。」といった指示、声かけがなされる授業。「黙っているグループは結論が出たグループだから、聞きに行くぞ！」話し合うこと、相談することに対して否とは言わせない、いささか強引な手立てではある。集団の前に立って、自らの考えを述べることができる、その第一段階として「自分の中で自分の考えをまとめられる」こと、第二段階として「それを身近な他者に伝えられる」ことが挙げられるだろう。私は『実力勝負』として、この第一段階を、『二人組での話し合い』により、第二段階を、一授業時間内に設定してみた。

○あくまで授業者の主観により導入前後の変化を比べると、授業への不参加者は大いに減ったようである。また、「読む」場面、「話す」場面の設定が、授業にメリハリを与え、集中力の途切れがちな生徒達に対しても良い気分転換（？）的な役割を果たし、（たとえ気持ちが途切れたとしても）授業の世界に復帰できる一契機となっているようだ。

話し合いの場面では、たとえノートにまとめられていなくとも、口頭でなら（ある程度）自分の考えを相手に伝えられるなど、考えを深め、まとめさせるきっかけとして有効であると確信している。自分なりの答えを、全く出せない者に対しては、そのパートナーの意見・考えに触れることが、答えをつかむ、まとめるきっかけとなっている場面も多々見られ、授業の流れについてくる上で良き確認、支援の場となっているようだ。苦悩を浮かべた生徒の表情が相棒さんの考えに触れたとたんに、喜び（発見、納得）の表情へと変化して行く様に出会うとき、授業者として何とも言えない喜びに恵まれることも度々である。

○読みの充実を図るための一つとして導入した『ブツ切りの読み』。これは古文教材において大いに力を発揮している。つまり、読みの「切り所」が明確になり、リズムが生まれること、更に二人組で読み進めることにより、互いの誤りが指摘でき、誤読が少なくなること等、利点は多い。「読み」に対する抵抗感をなくすことこそ、「古文」学習に対する抵抗軽減への第一歩ではないかと考える。

○今後はこの『二人組』を更に発展させたものを探っていきたい。単に人数を増やすだけではなく、グループ構成の面からもアプローチできればと願う。その中で、より多くの考えに触れ、自分の考えを一層深めようとする態度を養いたい。また、他者の考えに対して共感できる姿勢を生徒相互が備え合うことにより、教室全体として、多様な物の見方、考え方を受け入れられる力を持つことができればと願う。

今回、このような機会を与えてくださった吉田先生、そして国語科光葉会の先生方、学生時代に出会いに恵まれた恩師の先生方、同窓生の皆さんに深く感謝したい。

（静岡県立金谷高等学校）